

親鸞さまの

【本文】

末法第五の五百年

この世の一切衆生の

如来の悲願を信ぜずは

出離その後はなかるべし

【意訳】

お釈迦様が御在世の頃より遙かな時が過ぎました。仏様に成る(成仏する)可能性は極めて低い時代です。

この世に生まれた全ての者にとつて、

阿弥陀様の「必ず浄土へ連れ行き仏と成らせよう。この仏にまかせよ」というお心を聞き信ずるより他はありません。

さもなれば、成仏することなく、迷い続ける生き死にに終始するばかりです。

【私の味わい】

『ロスト・エモーション』、感情を無くした近未来の世界を描いた映画を見ました。数々の世界戦争で種の絶滅寸前までに追い詰められた人類は、一つの対策を実行に移します。憎しみ、奪い、争う根本は人の感情にある。つまり、その根本を科学・医学的に無効にすれば平和になるという論法です。結果、表面的な平和は訪れるのですが、中には感情の発露がわずかに兆す人もいて・・・、という導入の物語です。欲し、悲しみ、怒り、喜び、楽しみ、愛する。これを奪った人間を人間と呼べるのか、というテーマです。結論的には、煩惱は人間の悩みの根本であると共に、人間を人間たらしめている根本でもあるという、何ともやつかないものだといえるのではないのでしょうか。

そこで、仏様の教えとは、この煩惱とつきあわざるえない現実とどう向き合うのかをテーマにしています。煩惱の根底には、「自分中心」という底流があります。お経を通して、そして阿弥陀様を通して「自分中心」に喜怒哀楽をしている現実を知らされると、まるで不意に録音された自分の声を聞くような恥ずかしさを覚えます。そして、少しでも顧みようという姿勢が生まれます。そして、「自分中心」の最たる敵である死、その死は単なる自分の終わりではないのだと知ります。つまり、煩惱の束縛から解き放たれた仏様と成って、後の遺された者を仏教に導いていく存在になっていくのが命の終わりなのだという思いの中に息を引き取っていけるのです。